

ドイツにおける戦没者を巡る追悼空間

「ノイエ・ヴァッヘ」再考

くぼた ひろし
久保田浩

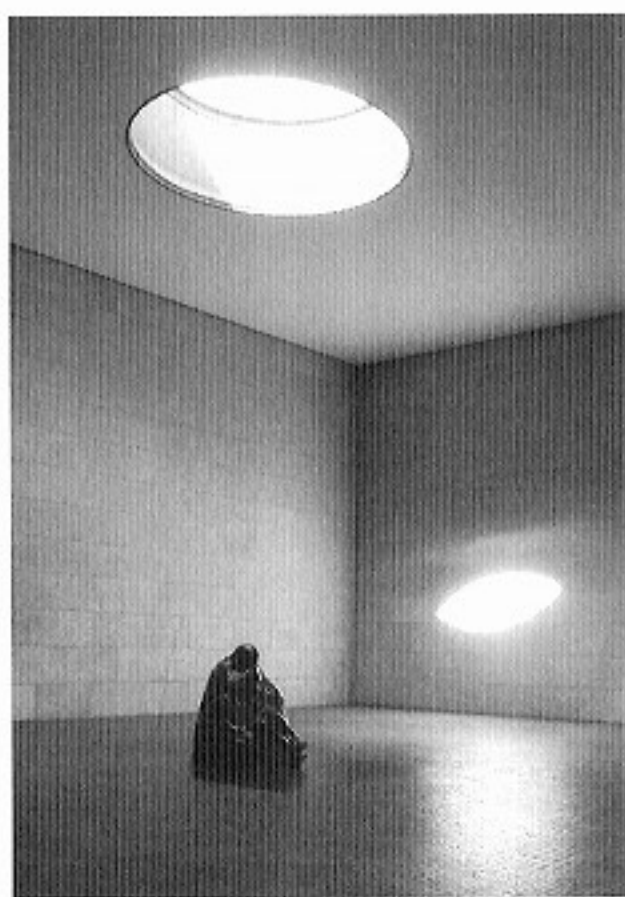
本稿ではドイツ連邦共和国首都ベルリンの「Zentrale Gedenkstätte der Bundesrepublik Deutschland ドイツ中央追悼所」である「Neue Wache 新衛兵本部」を中心としてドイツにおける戦没者追悼を巡る言説的・実践的空間を記述する。本稿が提起する問題を略述した後、ノイエ・ヴァッヘ（以下NWと略）の現状・歴史、この施設を巡る論争及び一九四五年以降の戦没者追悼施設設置を巡る議論を概略し、最後にNWがその中で「国立・中央」追悼施設としての位置を占めている戦没者追悼の空間を同定する。

問題の所在——「比較」によって
語られるもの、語られないもの

ベルリンの目抜き通りに位置するこの慎ましやかな建造物が日本で論じられるようになった背景は、一九九三年一月一日「Volksstrauertag 国民哀悼の日」（以下哀悼日と略）に「中央追悼所」として除幕された後、国家的な戦没者追悼のあり方例として紹介されたこと、二〇〇一年に官房長官の私的諮問機関「追悼・平和祈念のための記念碑等施設の在り方を考える懇談会」（以下追悼懇と略）において「国立・無宗教」の施設の一例として取り上げられたことである。こうした文脈において



ノイエ・ヴァッヘ正面 (©Land Berlin/Gläser)

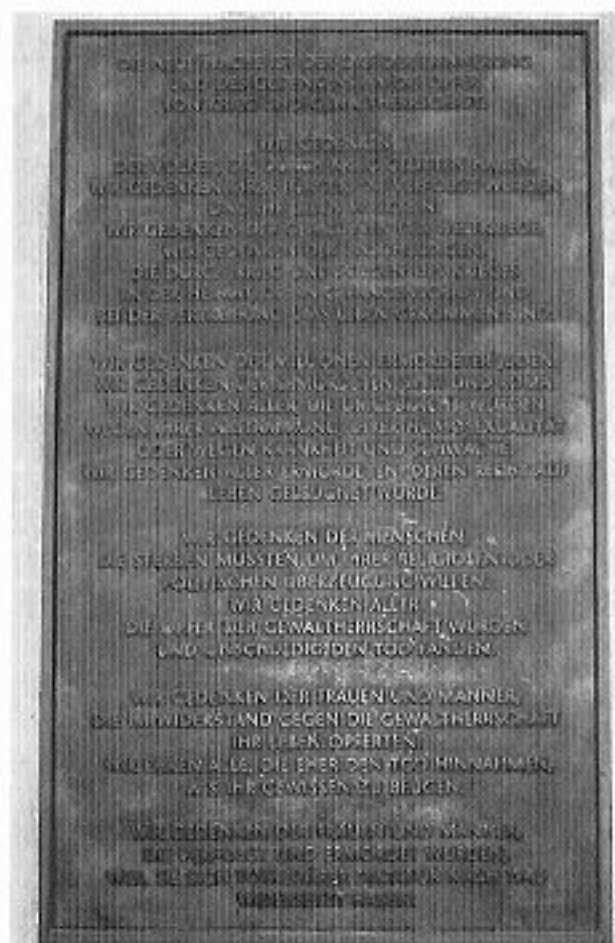


ノイエ・ヴァッヘ内部空間 (©Hiroshi Kubota/Anja und Fritz Heinrich)

NWはとりわけ「近代国民国家の限界を超える方向での平和主義的な新しい戦没者追悼所」として紹介された。範例としてのNWというこうした語りは、戦後補償、戦争責任、歴史認識のあり方を巡って語られる、範例としての戦後ドイツ社会という言説の延長線上にある。また「国立・無宗教」の施設に関する議論の枠内で比較項としてNWが主題化されている限りにおいて、それがドイツ社会における戦没者追悼に関連する広範な言説的・実践的空間の中で占める位置が十分に考慮されているとは言えない。



ケーテ・コルヴィッツ「死せる息子を抱く母」(通称「ピエタ像」)。手前に「戦争と暴力支配の犠牲者たちに」という碑文が見える。(©Hiroshi Kubota/Anja und Fritz Heinrich)



事後的に設置されたノイエ・ヴァッヘ玄関右手の追悼文 (©Hiroshi Kubota/Anja und Fritz Heinrich)

い機会であるといっても過言ではない。この施設が世を賑わせたのは除幕してから九五年に至るまでであり、その後の議論はホロコースト記念碑に取って代わられた感がある。その意味でこの記念碑を巡るここ一〇年来の議論は、NW論争の継続版であると見なすことも可能ではあるが、戦没者追悼を巡る包括的な議論からは離れつつある。

新衛兵本部が建設されたのは対ナポレオン解放戦争後の一八一六年であった。NWは単なる戦勝碑的存在ではなく、プロイセン君主制の威厳と栄光とを宣伝する場所

でもあった。その前では衛兵服務式が大々的に催され、

戦勝の度に盛大なパレードが開かれ、ホーエンツォレルン家主導の軍国主義的国家意識高揚、涵養の場となつて

いった。第一次大戦後は紆余曲折を経て、一九二九年プロイセン州の「Gedächtnisstätte für die Gefallenen

des Weltkrieges 世界大戦戦没者記念館」として利用されることになった。こうして出来上がったのがほぼ現在の

内部空間の原型であり、相違は現在ピエタ像が据えられている場所に花崗岩で作られた記念石(「祖国の祭壇」)

が置かれ、その上に金銀製のオークの葉から成るリースが安置され、記念石の前に「1914-1918」と彫られた小

さな石版が据えられていたことである。三一年の除幕以後この施設は戦没者の英雄精神が称揚される顕彰所とい

う性格を帯びていき、この傾向は三三年以降ナチズムによって強化されていく。NWは「Ehrenmal für die

Gefallenen des Krieges 戦没者顕彰碑」と改名され、国家およびナチ党の祝祭の折に、その前で親衛隊、突撃隊、

鉄兜団、ヒトラー青年団等の諸団体が行進し、英雄としての戦没者の死を通して将来的に獲得されるべき勝利を

演出する場となった。

空襲により大きな損傷を受けた後、漸く五六年になつて東ベルリン市当局がこの建造物を改めて「Mahnmal

für die Opfer des Faschismus und der beiden Weltkriege ファシズムおよび両世界大戦犠牲者の為の警告

記念碑」として再利用することを決定した。天窓が埋められ「1914-1918」という銘文は内部空間正面の「Den

Opfern des Faschismus und Militarismus ファシズムと軍国主義の犠牲者たちに」に取って代わられた。そして焼夷弾によって歪に変形した記念石がそのまま据えられ、反戦のパトスを可視化する場となった。けれども既に六〇年代にはそこで軍隊の式典が執り行われ、国家人民軍の歩哨が二人配置されるようになった。六九年には記念所全体が改装され、親衛隊によって射殺された無名の抵抗運動家の遺体が強制収容所の土と共に、無名のドイツ人兵士の遺体が大戦の戦場の土と共に安置された。かつて記念石があった場所にはクリスタルガラスのケースが置かれ、その中に「永遠の炎」が灯された。さらに「ファシズムと軍国主義の犠牲者たちに」という銘文の